

# 祇園南海「詠孔雀」考

壬 生 里 巳

はじめに

祇園南海は、漢詩人として、のちに南画家としても活躍し、近世期の文人の先駆的存在として位置づけられている。『南海先生文集』巻一に収録されている「詠孔雀」詩は、孔雀の特徴を写実的に描きつつ、その内容から孔雀に南海自身を仮託した作品とされている。本稿では、孔雀という詩題がどのように詠まれてきたのかという詠物詩的な背景を探りつつ、南海の詩の特色について考えてみたいと思う。

## 一 江戸時代の「孔雀」について

日本における孔雀の歴史は古く、『日本書紀』推古六年（五九八）八月の条に、「新羅、孔雀一隻を貢<sup>みかひ</sup>れり」とある。平安時代には「除災、除病、祈雨、安産などのさまざまな現世利益をもたらすとされた『孔雀経法』（孔雀明王を本尊としておこなう密教修法で、当時の貴族社会において盛行し、とくに仁和寺では覚法法親王らが御修法をつとめた）」と直接的なつながりをもつ「鳥として珍重され、長く朝鮮や中国から外交および通商の道具として贈られてきた<sup>1)</sup>。当然、

所有者も、天皇・院をはじめとする皇族や、摂関家など、一部の人の限定されていた。しかし、大型の鳥を飼育し続けることの困難さゆえか、江戸時代になると、珍しい動植物を見世物としながら営業する茶屋に孔雀も登場するようになる。たとえば『撰津名所図会』（寛政八（一七九六）〜十（一七九八）年刊）巻二にも登場する大坂の「孔雀茶屋」は有名だが、同様の茶屋が江戸の上野や浅草、京都では祇園や清水寺前、名古屋は若宮八幡前といった各地に存在し、人氣を博したという。その背景には、珍しい動物を見たいという好奇心とともに、舶来動物が本来の出生地に関係なく「西方」「天竺」と結びつけられ宣伝されたことから、その御利益にわずかでもあやかりたいという人々の願いも関係しているのだろう。このようにして、それまで文献や博物画でしか知られていなかった孔雀を、一般の人々も目の当たりにすることができるようになった。

さらに、「孔雀」は瑞鳥として、また、その華やかさから、文様は遊女の打掛にも使用されている。江戸中期の文人・大田南畝が江戸の吉原の松葉楼の遊女三穂松より衣が贈られた際に詠んだという狂歌「きてかへるにしきはみほの松ばやの孔雀しほりのあまのはこる裳」（三保の松）『遊戯三昧』および漢詩「美人我に贈る錦衣裳

／孔雀及び飛ぶ五彩の章」（『美人贈衣』・『南畝集』卷七・一三三二）  
などによっても確認できる（傍線は引用者による）。

## 二 祇園南海「詠孔雀」について

祇園南海「詠孔雀」詩は五言古詩というやや長い形式ではあるが、  
まず全体を概観しておきたい。（数字は引用者による。以下、同じ）

### 詠孔雀

孔雀を詠ず

- 1 孔雀生南越 孔雀 南越に生ず
- 2 五采何褹褹 五采 何ぞ褹褹たる
- 3 十歩一顧影 十歩 一たび影を顧み
- 4 五歩一顧尾 五歩 一たび尾を顧みる
- 5 致君玉堂上 君を玉堂に致して
- 6 恩愛無所比 恩愛 比する所無し
- 7 珠玉為我籠 珠玉を 我が籠と為し
- 8 稻梁為我餌 稻梁を 我が餌と為す
- 9 竦尾為君舞 尾を竦てて 君が為に舞ふ
- 10 満堂誰不喜 満堂 誰か喜ばざらん
- 11 奇珍世所疑 奇珍は 世の疑ふ所
- 12 奇服人所指 奇服は 人の指す所
- 13 一朝被讒言 一朝 讒言を被り
- 14 恩愛不可恃 恩愛 恃むべからず
- 15 毛羽非異初 毛羽 初めに異なるに非ず
- 16 君意已非始 君意 已に始めに非ず
- 17 未能從風翔 未能 風に從つて翔ける能はず

## 18 寧為野田雉 寧ろ野田の雉と為らん

第一～四句では、出身地、身体的な特徴、性質を通して、「孔雀」という鳥の特徴を紹介している。第一句「南越」は孔雀の生息地。現在の中国広東・広西省の地にあたる。南海の師である木下順庵の「孔雀」という詩に「遠く南越の岑より来る」（『錦里文集』卷一〈寛政二（一七九〇）年跋〉）とある。第二句「五采」は青・黄・赤・白・黒の五色のこと、「褹褹」は衣服の美しいさまの意。ここでは、孔雀の尾羽の上尾筒の先端が紫、金、緑などで彩られているさまを表す。唐・武元衡の詩に「動き揺らす 金翠の尾」（『全唐詩』卷三一六）とあるように、尾羽の美しさは孔雀の身体的な特徴の一つとして詠まれている。第三、四句は白居易「山雉」に「五歩に一たび草を啄み、十歩に一たび水を飲む」を踏まえた表現。また、「顧影」「顧尾」は自らの美しさを誇ると言われる孔雀の性質を表す。王建の詩に「尾を顧みて残金を惜しむ」（『和武門下傷草令公孔雀』）、南海と同時代の梁田蛻巖の「詠孔雀」にも、「山を掠めて 翠羽を驕り／水に臨んで 金鈿を護る」（『蛻巖集』卷二（延享三年（一七四六）刊））とある。

第八句「稻梁」は稲と大あわのことで、白居易の詩に「稻梁 山鳥を養ふ」（『西掖早秋直夜書意』）とある。第九句「竦尾」は、孔雀が尾を扇状に広げた様子を表す。第十句「満堂」は、その場にいる全員の色。第六句で「恩愛 比する所なし」というほど主人から寵愛を受けた孔雀は「珠玉」で造った鳥かごで、稲や大あわを餌として大切に飼育されている。その寵愛に応えるべく、第九、十句では、美しい尾を広げて主人のために舞い、その場にいる者すべてを

喜ばせるのであった。

しかし、第十一句以降では華やかな生活が一転する。第十一句「奇珍」は、珍しいもの。第十二句「奇服」は美しい服、優れた才能を指す語だが、ここでは、孔雀の美しい尾羽を表す。「美服は人の指ささんことを患へ／高明は神の悪しみに逼る」（張九齡「感遇」）。「奇珍」「奇服」と尊ばれた孔雀も、ある日突然讒言を受け、主人からの寵愛を失ってしまう。第十五句の「毛羽」は孔雀の羽のことだが、第二句「五采」や第十二句「奇服」と讃えられた美しさはそこにはない。孔雀の姿が変わったのではなく、あくまでも「君意」が変わったからだという。第十七句「鳳」は鳳凰。「池辺の鳳凰 伴侶と作す」（王建「傷草令孔雀詞」とあるように、孔雀は鳳凰に従って飛ぶとされてきた。しかし、主人から見捨てられた今は、野に生きる雉になろうと結ぶ。

この詩では、孔雀の数奇な運命を、その身体的特徴を踏まえつつ描いている。そもそも、「孔雀」は、どのような鳥として漢詩に描かれてきたのか、また「野田の雉」とはどのような存在なのかについて考えてみたい。

### 三 中国漢詩に描かれる「孔雀」像

中国漢詩に登場する孔雀の例として有名なのは、「孔雀東南に飛び／五里一たび徘徊す」で始まる「焦仲卿の妻の為の作」（『玉台新詠』巻一など）である<sup>3)</sup>。この一句は、東と南に分かれて飛び立った孔雀が、五里進んでは相手を思いためらつているさまから、夫婦の離別の悲哀や辛苦を象徴するものとして、この詩全体の主題をなしている。

また、唐の韋令公の旧宅で見捨てられた孔雀を見た武元衡が、座興にそれを詠じた五言律詩（『全唐詩』卷三二六）をきっかけに、多くの詩人がそれに和している。韋令公とは、韋草のことで、令公は中書令という役職を指す。今回は、これらの詩の中で、もつとも孔雀の姿に焦点を当てた白居易の詩を通して、韋令公の孔雀をめぐる状況を概観する助けとしたい。

和武相公感韋令公池孔雀（同用深字）（『白氏文集』卷十五）

索寞少顔色	索寞として 顔色少なく
池辺無主禽	池辺 禽を主るもの無し
難取帯泥翅	泥を帯ぶる翅を収め難く
易結著人心	人に著つて心結び易し
頂鬣落残碧	頂鬣は 残碧を落とし
尾花銷闇金	尾花は 闇金を銷す
放婦飛不得	放ち婦すも飛び得ず
雲海故巢深	雲海 故巢深し

第一句「索寞」は、さびしく荒れ果てたさま。「顔色」は、生彩を失う、という意。「君 金翠を見て顔色無しとす」（白居易「太行路」）。首聯は、主人に見捨てられ、誰からも世話を受けられなくなったという状況を説明する。頷聯で描かれる孔雀は泥のついた羽を閉じることでもできず、ただ、人からの世話を受けることを待つ無力な姿である。第四句「人に著く心」は、人に飼われたいという心の意。頸聯は、孔雀の身体的特徴でもある美しい羽に視点を移していく。第五句「頂鬣」は、孔雀の頭にある柔らかい毛、第六句「闇

「金」は、尾羽の美しく輝く眼状紋を指す。輝きを放っていた頂冠の柔毛や尾羽の美しい模様さえも、主人から見離された今は、精彩を欠くものになっている。尾聯では、孔雀を野に放つても飛び立つこともかなわず、雲海のかなたにある、南方の古巢ははるかに遠いままであるとは結ぶ。

ここで注目できるのは、孔雀の身体的な美しさが主人からの寵愛と結びついている点である。同様の例は、次に挙げる詩句によっても確認できる。

A 挙頭聞旧曲 頭を挙げて旧曲を聞き

顧尾惜殘金 尾を顧みて殘金を惜しむ

(王建「和武門下傷韋令公孔雀」)

B 翠尾盤泥金彩落 翠尾 盤泥 金彩落つ

(王建「傷韋令公孔雀」)

C 穆穆鸞鳳友 穆穆たる鸞鳳の友

何年来止茲 何れの年か来りて 茲に止む

飄零失故態 飄零にして 故態を失ひ

隔絶抱長思 隔絶して 長思を抱く

(韓愈「奉和武相公鎮蜀時詠使宅韋太尉所養孔雀」)

Aの「旧曲」は、昔なじんだ楽曲。武元衡の詩に「飛び舞ふ玉池の音」とあるように、孔雀がかつて主人の前で音楽に合わせて舞っていたことを思い出しているのだろう。「殘金」は、わずかに

残った上尾筒の各羽の先端にある、紫、金、緑などで彩られた眼状紋のこと。『本草綱目』によれば、孔雀は昔を振り返ると、金翠が急減するとある。Bの「翠尾」は孔雀の尾羽のこと。「金彩落つ」という表現もまた、緑色に輝く尾羽にみまれて、Aの「殘金」と同様、美しい模様も見えなくなるさまをいう。Cの「鸞鳳」は、至徳の瑞兆として現れる神鳥。「飄零」は、落ちぶれること。ここでは、「鸞鳳の友」として尊ばれた孔雀も、主人から見離され、昔の華やかな外見を失った今は、過去を懐かしむばかりであるということのように、身体的な美しさは、主人に大切に飼育されていることの証であった。さらに、それぞれの詩の結びでは、精彩を欠いた姿に加え、自ら飛び立つこともできない様子を通して悲哀を帯びた鳥として描かれている。

#### 四 白居易「山雉」との関係

ところで、南海の詩の「孔雀」もまた、主人に大事に飼育されていたものの、主人に見離されるといふ状況において「韋令公の孔雀」に類似している。しかし、第十五「毛羽 初めに異ならず」という表現に端的に示されているように、孔雀自身は変わっておらず、そこに悲哀は感じられない。むしろ、結びでは鳳凰に従って飛ぶことができなければ、「野田の雉」のように生きようと結んでいる。ではこの「野田の雉」とは、どのような鳥か、白居易の「山雉」との関係から考えてみたい。

#### 山雉

一五歩一啄草 五歩に一たび草を啄み

- 2 十歩一飲水 十歩に一たび水を飲む  
 3 適性遂其生 性に適ふて 其の生を遂ぐ  
 4 時哉山梁雉 時なるかな 山梁の雉  
 5 梁上無罾繳 梁上に罾繳無く  
 6 梁下無鷹鷂 梁下に鷹鷂無し  
 7 雌雄与群雛 雌雄と群雛と  
 8 皆得終天年 皆な天年を終ふるを得たり  
 9 嗟嗟籠下鷄 嗟嗟 籠下の鷄  
 10 及彼池中雁 及び彼の池中の雁  
 11 既有稲梁恩 既に稲梁の恩有れば  
 12 必有犠牲患 必ず犠牲の患ひ有り

第一句から四句は、雉の本性に適った生き方を描写したものである。第一、二句は、『莊子』養生主篇に「沢雉は十歩にして一啄し、百歩にして一飲す。樊中に畜はるるを斬めざるは、神王んと雖も、善からざればなり」とある。第五句「罾繳」は網やいぐるみのことで、鳥を捕らえるための仕掛け。第六句「鷹鷂」は鷹とはやぶさを指し、ともに雉の天敵を指す。第八句「天年を終ふる」は、天寿を全うするの意。『莊子』山木篇の「此の木（引用者注・山中の木、不材を以て其の天年を終ふるを得たり）に拠る。「山梁の雉」は、天敵に会うこともないので、みな命を全うできるといふ。第九句以降では、雉とは対照的な生き方をする「籠下の鷄」や「池中の雁」を取り上げる。「稲梁の恩」は、人間から餌を与えられている恩義を指し、それゆえ何らかの犠牲が必ず伴う生き方だと結ぶ。

この詩は、白居易が長慶二年（八二二）、杭州赴任の途上、山中で

野生の雉を見て詠んだものである。人間から世話を受け、快適に暮らす「籠下の鷄」や「池中の雁」に、役人としての不自由な生活を重ね、山中でのびのびと生きる「雉」に何物にも束縛されない生き方への憧憬を表している。

ところで、「山雉」の詩の世界は、南海の「詠孔雀」の作詩にあり、大きな影響を与えたことは明らかだろう。前述したように、孔雀の性質を描いた第一、二句「五歩に一たび影を顧み／十歩に一たび尾を顧みる」は、白居易の詩句を踏まえたものであり、同時に、『莊子』を念頭に置いていたことだろう。孔雀が「珠玉」で造られた籠で飼育され、「稲梁」を与えられていたという状況もまた、白居易の詩の「籠下の鷄」や「池中の雁」を連想させる。「鷄」や「雁」は、「既に稲梁の恩有れば／必ず犠牲の患ひ有り」と何らかの犠牲を伴うことが指摘されているように、南海の描く「孔雀」もまた詩の冒頭では、主人の寵愛を頼みとする不安定な生き方であった。しかし、結びでは、「寧ろ野田の雉と為らん」と、野生の雉のような、本性に適った生き方を望んでいる。

ただ、白居易の詩では誰に頼ることもなく、野で自由に生きる「雉」と人間の世話を受け快適な生活を送りながらも、自由がない「鷄」「雁」との対照的な生き方を通して、束縛のない生き方への憧憬が綴られている。それに対し、南海の詩では一羽の孔雀が「野田の雉」のように束縛されない生き方を選ぶ姿を通して、そのような生き方への強い決意が表れている。

#### おわりに — 南海と「孔雀」 —

ところで、「詠孔雀」詩に見られる主人からの寵愛を失った孔雀

の凋落という構図は、江戸での遊学を経た南海が、元禄十年（一六九七）二十二歳で和歌山藩の儒官として任ぜられたが、元禄十三年に不行跡によつて城下を追放されるといふ自身の人生を彷彿させるものである。その当時の様子について、南海は「庚辰の夏、余、罪を南海に疚つ。鬱鬱として一室に居る。六月溽暑、中夜寝ねられず。因りて江都の旧遊を思ふ（以下、南中の作）」という七言古詩（『木門十四家詩集』下）の中で、次のように詠んでいる。

男児少小気勃勃

古人可及道可達

江東才子多豪俊

相遇交際不容髮

夜月追隨詩酒筵

春風走馬遊俠窟

（中略）

口吐万言皆糟粕

身守一經何管管

由来方円不同器

世上謗譽共轟轟

豈知一朝蒙嚴譴

南竄窮荒路幾程

（中略）

丈夫遭遇皆有時

一浮一沈自古爾

生涯窮通不足嘆

男児少小より気勃勃たり

古人は及ぶべく、道は達すべし

江東の才子 豪俊多し

相遇ふて、交際すること髪を容れず

夜月に追隨す 詩酒の筵

春風に馬を走らす 遊侠の窟

（中略）

口は万言を吐くも 皆な糟粕

身は一經を守りて 何ぞ管管たる

由来 方円は器を同じくせず

世上 謗譽 共に轟轟

豈に知らんや 一朝 嚴譴を蒙らんとは

南のかた窮荒に竄れんとするも 路幾程

丈夫の遭遇は皆な時有り

一浮一沈は 古より爾り

生涯の窮通は嘆くに足らず

唯恨親友無相期 唯だ恨むらくは 親友相期する無く  
相思緑水又青山 相思ふは 緑水又た青山  
夢寝杳然見容顔 夢寝に杳然として容顔を見る  
（後略）

「勃勃」は、勢いの盛んなさま。「江東才子」は、木下順庵の門下を指す。「豪俊」は、優れた人物。杜牧「題烏江亭」に「江東の子弟 豪俊多し」とある。「糟粕」はつまらないものたとえ。「身守一經」は、いくつもある経書のうち、一つだけを守ること。『史記』樂書に「一經に通ずるの士、独り其の辭を知ること能はず」とある。「管管」は、あくせくと働くさま。「方円」は、四角いものと円いものことで、合わないものを指す。「謗譽」は、そしりと誉めるの意。「轟轟」は、大きな音が鳴り響くさま。「嚴譴」は、嚴重ながめ。「窮荒」は、荒れ果てた地。南海は不行跡によつて和歌山城下追放の処罰を受け、那賀郡貴志莊長原村（現、和歌山県紀の川市貴志川町長原）に謫居させられたことを指す。この詩の前半に描かれているように、木下順庵の門下との華やかな交流を謳歌した南海であったが、和歌山での生活は性に合わなかったようである。この点について、日野龍夫氏は、南海が和歌山に馴染めなかった背景を、「和歌山の土地柄の問題ではなく、青春そのものであった江戸の地から引き離されたこと、儒業にたずさわることに意欲をかき立てられなかったこと、むしろそれが自分の心を偽る仕事のようにさえ感じたことによるもの」と推測し、処罰の意味を次のように説明している。

書生時代の満々たる客気をそのまま持ち込んできた南海は、意

識的にか無意識にか、国元の人々の生活意識や役所のしきたりと衝突する言動のみ多く、周囲との調和を欠いて、孤立状態に陥っていたと思われる。その挙げ句、蔑視していた卑俗な現実から手厳しい反撃を受けたというのが、処分の意味するところであつたらう<sup>(4)</sup>。

そこでの生活は困窮を極めたようだが、それよりも「唯だ恨むらくは親友相期する無く」と、かつての友との再会を約束できない状況を辛く思っている。

これらを踏まえて「詠孔雀」詩について考えてみると、第二―四句に見られる自らの美しさを誇る孔雀像は、己の才能を自負する若者の姿と重なる。また、第十一、十二句「奇珍は世の疑ふ所／奇服は人の指す所」は、江戸から帰ってきたばかりの若者が儒官に取り立てられたことへの反発や嫉妬心を連想させる。「不行跡」によって城下を追放されたことに対しても、第十五、十六句の「毛羽初めに異なるに非ず／君意已に始めに非ず」と、君主が讒言によって自分を処罰したことへの批判の気持ちを読み取れる。つまり、この詩で描かれた「孔雀」に南海は自身を仮託して、「野田の雉」のように束縛されない生き方をしようと結ぶことで、この不遇な状況を慰めたことであらう。

ただ、本詩の成立について、『新編日本古典文学全集 日本漢詩集』の徳田武氏の注では「孔雀に託して自身が譴責されたことを詠じた作で、二十四歳、城下を追放されたころのものである」と指摘しており、拙稿でも、詩の表現からその頃の作ではないかとその内容から推測した。しかし、杉下元明氏が考察しておられるように、

南海の詩は配列から制作時期を推定する可能ではあるが、「詠孔雀」のような五言古詩の形式の数が少なく、制作年の順に配列されたのが正徳以前なのか以後なのかさえ確定することが不可能であること、また、「他の詩の中でもかつての日々を回想して詠んだ可能性があることを述べておきたい<sup>(7)</sup>。

注(1) 川添裕氏「舶来動物と見世物」〔中澤克明編『人と動物の日本史2』(吉川弘文館、二〇〇九年)に所収)に詳し。

(2) 南畝が享和元年に大坂の孔雀茶屋を詠んだ漢詩「孔雀亭」に「美人遊戯して闌干に倚り／自ら蘭若翡翠の看を作す／共に指す籠中の双孔雀／悔ゆらくは衾帳をして孤鸞を繡せしめんことを」〔南畝集〕巻十二・一九八五〕とある。

(3) 「焦仲卿の妻の為の作」は、後漢末の建安年間に、廬江府の小役人であった焦仲卿の妻が姑によって実家に戻され、実家でも再婚を強いられため、入水し、それを知った仲卿もまた、彼女の後を追って自殺するという内容を、問答体で綴った詩である。「孔雀東南飛」という一句によって広く人口に膾炙し、その表現は、簡文帝「詠中婦織流黄」〔玉台新詠〕巻七、李白「廬江主人婦」〔李太白詩集〕巻二十一〕などによく見出せる。

(4) 日野龍夫氏「祇園南海」〔江戸詩人選集 服部南郭 祇園南海〕(岩波書店、一九九一年)、三五七頁。

(5) 『新編日本古典文学全集 日本漢詩集』(小学館、二〇〇二年)、三五五頁。

(6) 拙稿「祇園南海『詠孔雀』」(鈴木健一編『鳥獣虫魚の文学史』二(三弥井書店・二〇一一年刊)に所収)。

(7) 杉下元明氏「祇園南海の壮年時代」〔日本漢文学研究〕九・二〇一四

年三月)。また詩の制作時期の推定については、同氏「祇園南海の詩作と推敲」「一夜百首考」(『江戸漢詩 影響と変容の系譜』ぺりかん社・二〇〇四年に所収)に詳細な考察がある。

〔付記〕

本稿は、拙稿「祇園南海『詠孔雀』」の内容をもとに、日本女子大学文学部日本文学科学術交流企画「江戸漢学の豊潤な世界」(於日本女子大学、二〇一七年三月十一日開催)での口頭発表を、補足修正するものである。なお、席上、御教示・御批正を賜った池澤一郎先生に深謝申し上げます。

また、南海詩の引用は、『南海先生文集』(『詩集日本漢詩』一・汲古書院)『木門十四家詩集』(『詞華集 日本漢詩』九・汲古書院)による。南海詩の訓読は、主に菅野禮行・徳田武校注・訳『日本漢詩集』(新編日本古典文学全集86(小学館・二〇〇二年刊))および山本和義・横山弘注『服部南郭 祇園南海』(江戸詩人選集3(岩波書店・一九九一年刊))によった。

## 受贈雑誌(一)

- |                           |                                |
|---------------------------|--------------------------------|
| 愛知教育大学大学院国語研究             | 愛知教育大学大学院国語教育専攻                |
| 愛知県立大学説林                  | 愛知県立大学国文学会                     |
| 愛知淑徳大学国語国文                | 愛知淑徳大学国文学会                     |
| 愛知大學國文學                   | 愛知大學國文學會                       |
| 青山語文                      | 青山学院大学日本文学会                    |
| 字大國語論究                    | 字都宮大学国語教育学会                    |
| 歌子                        | 実践女子短期大学部日本語コミ<br>ユニケーション学科研究室 |
| 愛媛国文研究                    | 愛媛国語国文学会                       |
|                           | 愛媛県高等学校教育研究会国語部会               |
| 愛媛国文と教育                   | 愛媛大学教育学部国語国文学会                 |
| 大阪大谷国文                    | 大阪大谷大学日本語日本文学会                 |
| 大妻国文                      | 大妻女子大学国文学会                     |
| 大妻女子大学紀要                  | 大妻女子大学                         |
| 大妻女子大学草稿・テキスト研究<br>所研究所年報 | 大妻女子大学草稿・テキスト研<br>究所           |
| 岡大國文論稿                    | 岡山大学言語国語国文学会                   |
| お茶の水女子大学國文                | お茶の水女子大学国語国文学会                 |
| 香川大学国文研究                  | 香川大学国文学会                       |
| 学芸国語国文学                   | 東京学芸大学国語国文学会                   |